

沖縄の漁村における街並みと住宅の形態に関する研究

—伊良部島佐良浜地区を事例として—

Keywords

琉球文化 漁村 自然環境
歴史 宗教 過疎化



AK12100 松本 圭司

1. はじめに

1.1 研究背景

漁村では、海に面して住宅を建てるなど、街並みや建築に関して漁村独自の文化があることが知られている。しかし、住宅や街並みの形成は漁村であるからといってすべて同じだとは限らず、農地等が多く住宅と住宅が離れている集落もあれば、道路や海岸線に沿って列状に住宅が密集する集落もある。それらは漁村独自の文化とは別の要因が数多く存在しているからである。また琉球文化の残る沖縄では、古くから伝承されている独自の空間分類があり、たとえば住宅は大きく表座と裏座に分けられる。その他にも沖縄には街並みや住宅に関して独自の文化があることが知られている。

本研究の調査地である沖縄県宮古島市伊良部島佐良浜地区は、漁村文化と琉球文化の2つを併せ持つ地区であり、他の漁村とは異なる独自の街並みや住宅の特徴がある。また、時代の変化の中でその時々ニーズに合わせて街並みや住宅の形態が変化していくことは、都市部の街並みや住宅が変化することと同様である。調査地である佐良浜地区でも時代の移り変わりによって変化している点は挙げられたものの、一方で歴史ある街並みや住宅の形態が現存している点も多くみられた。本研究では、沖縄の自然環境、宗教、歴史が街並みや住宅の形態に深く関わっているのではないかと考え研究を行うこととなった。

1.2 研究目的

街並みと住宅を形成する要因はその地域の経済、自然環境、宗教、歴史、産業など数多く挙げられる。本研究ではそれらの中から佐良浜地区を特徴づける要因として自然環境、宗教、歴史の3つをピックアップし、それぞれが佐良浜地区の街並みと住宅にどう影響しているかに着目し、佐良浜地区の街並みと住宅の形態を明らかにすることを目的とする。また深刻化する過疎化や高齢化などの社会問題は街並みや住宅を含めた、独自の文化を後世に伝承していくためには考えなければならない重要事項である。本研究では、この社会問題とどう向き合っていくべきかも検討する。

1.3 研究方法

沖縄県宮古島市伊良部島佐良浜地区を本研究の調査地とし、フィールドワークに基づき研究を進める。調査期間は8月5日から8月14日の9日間である。フィールドワークの内容は以下の4項目である。

- ①佐良浜地区の村落図を作成し、住宅の密集度、道路の狭さや入り組み度合いを明らかにする。
- ②佐良浜地区の海岸から最高高度にある丘を結んだ村落断面図を作成し、住宅地の特徴を明らかにする。
- ③調査住宅(8軒)毎に各階平面図(1/50)、外構図(1/200)を作成し、佐良浜地区独特の自然環境、歴史、宗教が住宅や生活にどう影響しているかを明らかにする。
- ④聞き取り調査を基に佐良浜地区に住む住民の生活実態を明らかにする。主な内容は、住宅の間取りと使い方、儀礼、過疎化や自然環境への対応についてなどである。

2. 調査地の概要

2.1 地勢・生業

伊良部島は、宮古列島のひとつであり、行政区分としては沖縄県宮古島市に属する。伊良部島は宮古島の北西約5kmに位置し、地理面積29.06km²、周囲26.6kmの隆起サンゴにより形成された島で、全体として平坦な地形をしており、最高地は標高89.0mである。

伊良部島は池間添、前里添、佐和田、長浜、国仲、仲地、伊良部の7つの行政区(字)に分けられる。佐良浜地区は伊良部島の東部に位置し、海に面した地区であり、行政区(字)としては池間添と前里添からなる。伊良部島はなだらかな地形が広がる島であるが、佐良浜地区は海岸沿いに平地が少なく、丘が隣接している。

島の主な生業は佐良浜地区を中心としたカツオ漁とサトウキビなどの農業である。

2.3 人口

伊良部島の人口は、昭和25年のピーク時には11,433人であったが、時代が経つにつれて右肩下がりに減少していき、平成26年には5,418人となり、過疎化が深刻である。また高齢化率も32.7%と超高齢社会であり、宮古列島全体の高齢化率23.3%と比べても高く、高齢化も進行している。

2.4 佐良浜地区の成り立ち

佐良浜地区は元々は池間島の分村である。1720年に現在の池間島（沖縄県宮古島市平良）は人口過密状態に陥り、一部の人々はそこから分村し、佐良浜地区に移り住んだ。池間民族とは池間島民の自称だが、池間島から分村により拡散した佐良浜地区と平良西辺の西原地区に暮らす人々も池間民族と自称する。彼らは海洋民族としての誇りを持ち、宮古島の他の地域とは異なる独自の文化を持つとされる。また先祖代々からの神事や祭事を重んじ、今もその伝統は受け継がれている。

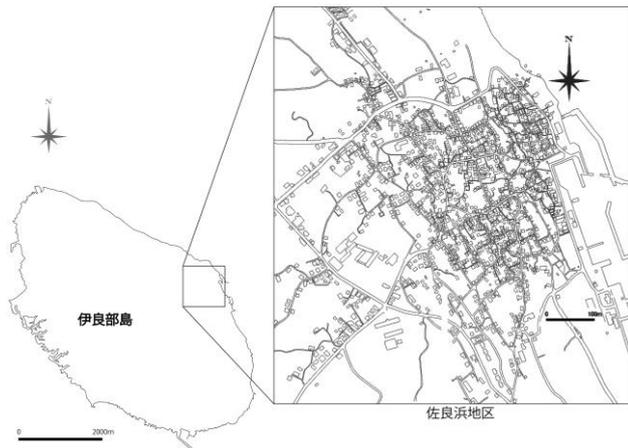


図1 伊良部島佐良浜地区

3. 街並み

3.1 自然環境がもたらす街並みの特徴

3.1.1 雨水の利用

水道が普及する以前、離島である伊良部島において水の確保は容易ではなかった。住民は天水と呼ばれる雨水を貯水するタンクを庭に設置し、水を確保していた。水道設備の行き届いた現在でも天水タンクを設置してある住宅はみられ、洗濯や畑に水をやる際などに活用している。



写真1 天水タンク

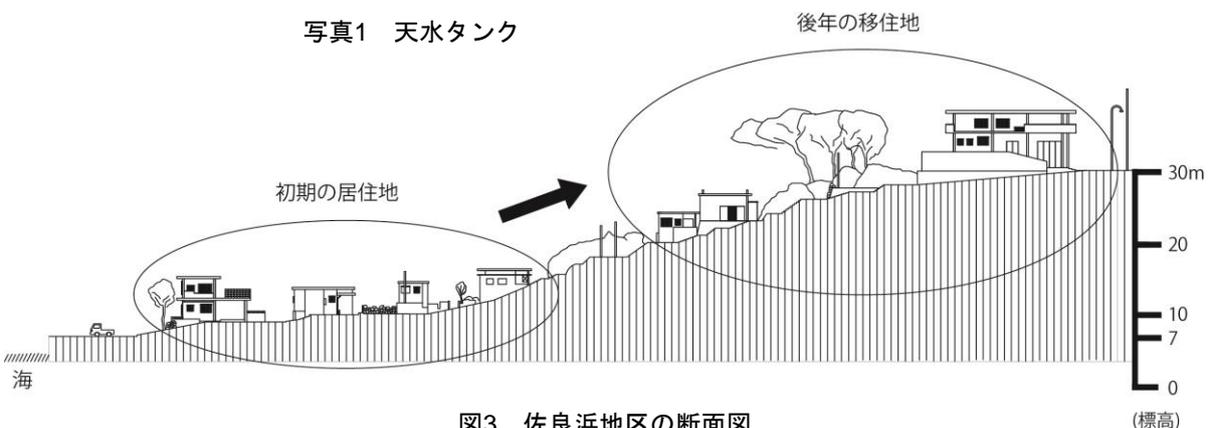


図3 佐良浜地区の断面図

3.1.2 防風林の活用

防風林とは、台風や季節風による風を分散することにより、周辺の風を弱め、農地や住宅への被害を軽減する目的のために造成・維持される森林のことである。海に面した伊良部島では、塩害対策としても防風林が用いられている。防風林が風を弱める効果は、一般的に樹木の高さHに対して、風下側に20倍程度とされている(図2)。仮に、防風林の高さが5mだとすると100m先まで防風効果がある。住宅への効果としては、防風、防潮による壁の劣化防止があげられ、農作物への効果としては、農作物の品質維持や、農薬等の飛散防止、防塵効果などがあげられる。防風林は風を防ぐ役割だけではなく、土砂流出を防ぐ、影を作り休息の場を提供する、農村景観を形成するなど、地域の環境への効果もある。

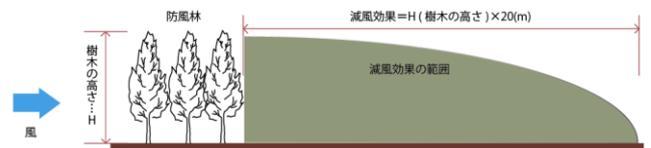


図2 防風効果の範囲

3.2 歴史がもたらす街並みの特徴

3.2.1 密集した住宅群

伊良部島は20世紀初頭からカツオ漁が盛んであり、佐良浜地区にはカツオ漁やカツオ節製造を生業としている島民が多く暮らしている。前述したように、佐良浜地区は海岸沿いに平地が少なく、丘が隣接している。交通手段の乏しい時代、島民の先祖達はその日の海の様子を把握し、すぐに漁にいけるよう、海岸沿いに住宅を建てる傾向があった。しかし、1980年代頃になると、1回の長期遠征の漁で住宅が1軒建つほどの収益があり、また車などの交通手段が普及したことにより、漁師の中には隣接する丘を開拓し、漁港近辺から開拓地へと移住し、新居を建てた(図3)。しかし現在でもなお漁港近辺は、坂道や入り組んだ道、また階段が数多く存在し、車で通行することの出来ない道が数多く存在している。

3.3 宗教がもたらす街並みの特徴

3.3.1 点在する御嶽

御嶽（うたき）とは、琉球の信仰における祭祀などを行う空間である。沖縄本島及びその周辺離島では通常、一村一御嶽が主流であるが、宮古群島や八重山群島などの先島地方では一村複御嶽が主流である。よって伊良部島も一村複御嶽の形態が取られており、佐良浜地区では、中心となる大主神社という御嶽がある他に、一般に里神と呼ばれる複数の御嶽が点在している(図4)。先祖から受け継いだ神事や祭事を重んじる伊良部島の島民にとって、御嶽は重要な場所であり、安易に移設または取り壊すことができない。これこそが複雑に入り組んだ街並みが未だに残っている原因でもあると考えられる。



図4 佐良浜地区の御嶽と里神の位置

4. 住宅形成の要因

4.1 自然環境がもたらす住宅の特徴

4.1.1 暴風への対策

伊良部島は台風の襲来頻度が高く、昔から台風により幾度となく甚大な被害を受けてきた。その過酷な自然環境から住宅を守るために、花ブロックと呼ばれる穴の開いたコンクリートブロックを外壁に使用している住宅が数多くある。花ブロックは強い日差しを遮り、風を通す役目も果たしている。また、一般的なコンクリート塀とは異なり、花ブロックはデザイン性にも優れており、単調な外観をしているRC造の住宅の多い沖縄地方において、華やかさをもたらしている。図5はN・A氏宅の花ブロックのデザインと花ブロックの位置を表している。

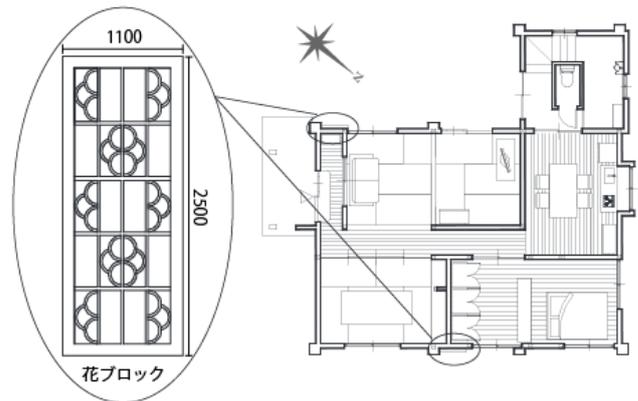


図5 N・A氏宅の花ブロック

4.2 歴史がもたらす住宅の特徴

4.2.1 住宅の空間分類

沖縄の住宅には古くから伝承されている独自の空間分類がある。内部空間は、大きく表座と裏座の2つに分けられ、また表座は一番座、二番座、三番座に分けられる。一般に一番座は床の間、二番座には茶の間が設けられ、三番座は寝室にあたる。裏座は一番・二番・三番座の裏間取り(奥の部屋)の総称であり一番座の裏座は貴重品などの物置、二番座の裏座は休憩室や食堂などに使用され、三番座の裏座は道具置き場として使用されていた。図6はN・S氏宅(平屋建て)の間取りである。現在でもこのような空間分類がされている住宅は、調査対象の8軒すべてでみられたが、住宅によりそれらの空間の用途は様々であった。

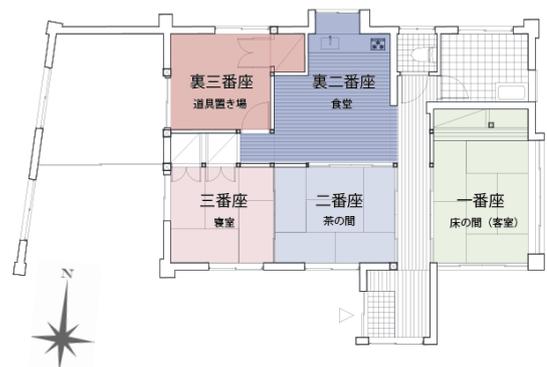


図6 N・S氏宅の間取り

4.2.2 増築

前述した、佐良浜地区の住宅の表座、裏座の有無、またそれぞれの住宅によって空間利用が異なるという現象は、増築が深く関係している。本研究の調査住宅では8軒中5軒の住宅が2階建てであり、その5軒中3軒の住宅が元は平屋であったが、増築により2階建てとなっていた。その要因として、家族が増え、子供部屋などを確保するために増築をする必要があったが、佐良浜は土地が狭く漁港付近に密集して住宅が建てられているため、2階建てにする必要があったのだ。

本来、表座、裏座などの空間利用の分類は平屋の住宅に主に用いられるものであり、2階建ての住宅には当てはまらない。しかし、元々平屋であった住宅を増築によって2階建てにした住宅には、表座、裏座などの空間分類は残しつつも、2階の空間が生まれたことにより空間の用途に関しては変化していったのである。

4.3 宗教がもたらす住宅の特徴

4.3.1 火の神(ヒヌカン)

伊良部島の住宅には、火の神(ヒヌカン)が台所に祀られている。女性が拝む場として現在でも多くの住宅にみられ、他人が拝むことはできないとされている。調査対象住宅では、8軒中5軒の住宅の台所に火の神が祀られていた。



写真2 N・A宅の火の神

4.3.2 マウ神(マウガン)

マウ神(マウガン)は個人の守護神であり、全国でも宮古島の人々にだけ信仰され、住宅内のマウ神棚に祀られている神である。調査対象住宅では、8軒中6軒の住宅で祀られていた。祀られている場所としては、6軒中、一番座に2軒、二番座に1軒、裏座に3軒であった。また、空間の用途別に分類すると、6軒中、床の間に2軒、茶の間に1軒、衣裳部屋に2軒、寝室に1軒であった(図7)。



写真3 N・A宅のマウ神



図7 住宅内のマウ神棚の位置

5. 考察、まとめ

本研究では漁村と琉球文化の混合により、街並みと住宅に特異性が現れるのではないかと仮説のもとで、街並みと住宅の形成要因を、自然環境、歴史、宗教の3つに分け、分析した。その結果、琉球文化の色濃く残る南西諸島だからといって、街並みや住宅は単に一括りにはできず、土地ごとの自然環境、歴史、宗教のような様々な要因によっても街並みや住宅の特徴に違いがみられ、特異性が表れるということがわかった。また、漁港付近に密集して住宅を建てるという漁村特有の傾向が街並みのみならず、琉球文化独特の住宅にまでも影響を及ぼしていることがわかった。それは、本研究室で2013年におこなわれた沖縄県宮古島市下地字来間島での研究と照らし合わせても明らかである。たとえば、2階建ての住宅の割合があげられる。来間島は調査住宅である22軒中、2階建ての住宅が1軒だけであるのに対し、佐良浜地区では8軒中、5軒(うち3軒が増築)もの住宅が2階建てであった。これにより、琉球文化独自の表座、裏座などの空間分類は残しつつ、空間の用途は変化し、またマウ神の祀られている場所などについても、住宅により変化が表れたと考えられる。

一方で、過疎化や高齢化などの社会問題は佐良浜地区の独自の文化を後世に伝承していくためには考えなければならない重要事項である。これらの社会問題対策の足がかりとしてあげられるのが、2015年1月31日に開通した、宮古島と伊良部島間を結ぶ伊良部大橋である。伊良部大橋の開通により宮古本島への行き来が容易となり、住みやすい環境づくりに貢献している。また、過疎化や高齢化と付随して生じる核家族化は、住宅空間の利用にも大きく影響している。それは主に2階建ての住宅で顕著にみられ、調査対象住宅では、2階建てである住宅の5軒中、4軒の住宅で現在では使われていない空間が存在していた。内閣府の「都市と農山漁村の共生・対流に対する世論調査」(2005年11月)では、都市に住む50代の約3割が農山漁村に移り住みたいと思っているという結果が出ている。このような人々に、空き家や使われていない空間を貸すなどして、積極的に受け入れることも、街並みや住宅の特徴、独自の文化を後世に伝承していくためには必要なのではないかと考える。

参考文献

- 1) 永瀬克己「沖縄・よみがえる民家と集落」三協社
- 2) 山下祐介「限界集落の真実—過疎の村は消えるか?」ちくま新書
- 3) 仲間明典「佐良浜漁師達の南方鯉魚の軌跡」宮古島市地域おこし研究所
- 4) 譜久村和海「佐良浜先祖の軌跡」
- 5) 宮古島市役所「平成26年度 統計みやこじま」宮古島市
- 6) 宮古島市ホームページ www.city.miy